

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 富神開眼と懶惰奢侈よりの解放 ( 古希臘經濟思想研究の一節 )   |
| Sub Title        |   |
| Author           | 高橋, 誠一郎   |
| Publisher        | 慶應義塾理財学会  |
| Publication year | 1926  |
| Jtitle           | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.20, No.11 (1926. 11) ,p.1440(74)- 1468(102)   |
| JaLC DOI         | 10.14991/001.19261101-0074  |
| Abstract         |   |
| Notes            |   |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19261101-0074">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19261101-0074</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 富神開眼と懶惰奢侈よりの解放

(古希臘經濟思想研究の一節)

高橋 誠 一 郎

西紀前第五世紀及び第四世紀に於て繁盛なる商業的資本主義の國家を發達せしめたる希臘——就中雅典は漸次其の繁榮を喪はんとするに至れり。希臘本土に於ける經濟生活衰頹の主因は第四世紀及び第三世紀に於て諸市邦を攪亂せる連續不斷の戰爭なりき。這般の戰爭は其の慘害を極小ならしめ、之れを一定の國制的統制に服せしめんとする幾多の努力行はれたるに拘らず、勝者たるも敗者たるを問はず、總べての交戰國に取りて益々痛酷、殘虐且つ慘憺たるものと爲り行けり。其の敵の國土を蹂躪し、其の作物、葡萄園、及び橄欖林を破壊し、農家を焼き拂ひ、戰利品として人間及び家畜を捕獲賣却し、其の侵入せる土地の物資に依りて軍隊を給養するの舉は愈々一般に行はるゝに至れり。

而も外戰と相並んで希臘本土及び島嶼の大多數に於ける諸市邦内に戰はされたるものは富裕なる市民階級の發達と之れに對應せる民衆の疲弊に其の端を發せる不斷の階級闘争なり。斯くの如き階級闘争は堅實なる資本主義的制度の生長發達をして至難ならしめたり。洵に市邦内に於ける健全なる經濟生活は是れに由りて殆んど不可能と爲れり。希臘都市内に於ける不和軋轢は愈々益々純乎たる社會的經濟的闘争の性質を具現せんとするに至れり。此の闘争の主要目的は勞働條件の改善及び勞資關係の改良制規に由る生産の増加に非ずして、概して強暴なる革命的手段に依つて遂行せられる可き財産の再分配なりき。其の喊聲は土地の再分配と債務の廢除とに在りき。斯くの如き絶叫が早く既にペロポネネッス戰役の末期に於て發せられたるの事實は雅典人が四百〇一年に審理官(Synarchis)の宣誓中に這般の問題を投票に附するを禁止せる一項を挿入せるに徴して明かなる可し。(M. Rostovtzeff, The Social & Economic History of the Roman Empire, 1926, pp. 1-2.) シラクラーザの煽民政治家は民衆に告げて曰く「富の平等が自由の本源たること、恰も貧困が隷屬の端緒たるが如し」と。(Gustave Glotz, Ancient Greece at

Work, an economic history of Greece from the Homeric Period to the Roman Conquest, 1926, p. 157)。

而して吾人はアリストファネスの喜劇「婦人議會」に於て、彼れ等の夢想せる貧困の廢除と財貨共有の状態とが戲畫化せられたるを觀たり、「三田學會雜誌」第二十卷第九號所載拙稿「波斯戰役以後の雅典に於ける社會思想」(アリストファネスは「ペロポネッス戰役」其の悲劇的終局とを目睹せるものなり。彼れは此の戰役中に於て、又た其の終局後に於て更に甚しく雅典の無産階級を捉へたる共產主義的情操を感得せり。雅典の蒙れる大災害は一切の權威、一切の國家的團結を震盪せり。さなくとも凡ゆる新事物を熱狂的に追求する雅典の庶民は熱烈に社會の共產主義的改造を憧憬せり。(M. Beer, Allgemeine Geschichte des Sozialismus und der sozialen Kämpfe, 1924, S. 61.)。而してアリストファネスの喜劇の目的は一方に於て共產主義的翹望を嘲笑すると共に、他方に於ては又た金權政治的帝國主義的欲情を痛罵するに在り。(a. a. O., S. 62.)。即ち時代思潮に對する彼れの批評は四百〇八年並びに三百八十八年に上演せられたる其の「富神」(Πλοτοκος)に於て更に一

般的にして更らに深遠なるものあるを觀る。

希臘の神話は富神プルトスを以て農業及び之れに基礎を有する文明の女神デメーテル (Δημητηρ)の子としてクレータ島に生れたるものと説く。デメーテルは其の愛人イアシオス (Iasion)と交つて「二度び耕されたる田圃」(τοπιον)にプルトスを産めり。富神の父イアシオスはジウス大神の嫉妬によりて雷電に打たれて死せり。ジウスは又たプルトスをして盲目ならしめたりと傳へらる。蓋し此の富の神をして唯り善人のみに其の恩寵を與へしむることなく、曲直如何を問はずして其の賜物を人々に授けしめんが爲めなり。テトベ及び雅典に於ては、彼れは運命の女神若しくは平和の女神の腕に抱かれたる頑是なき幼童として表現せらる。アリストファネスは這般の神話に其の題材を求めたり。

## 二

貧しき境涯にありながら、正しき道を歩みて、徒らに年老いたるクレミロスは、其の獨り子を教育するに、富貴利達の道なる不正横道を以てす可きや否やをデルフォイの神託に問ふ。神託は何等明確なる解答を與へずして、唯だ彼れに告ぐるに、

彼れが神殿を退出するに際して、最初に出で逢へる人の後を追ふ可きことを以てす。(Pitius, 33-43)。クレミロスの出で逢へる最初の人は盲ひの老人なり。此の見窄らしき盲人こそ即ち富の神ブルトスにして、恰も彼れはパトロオクレスの家を出でたる所なり。パトロオクレスは鄙吝なるが爲めにスバルタ流の生活方法を愛し、公設浴湯に赴くことをすら吝みて、生れてより未だ曾つて其の身を洗ひたることなき人にして、「*Ἰαροκλέους γενωχότερος*」なる語は爾後極度の吝嗇と貪慾とを表示するの語と爲れり。クレミロスは富の神が何故に斯くの如く盲目と爲れるやを問ふ。ブルトス答へて曰く「ジウスは人間に對する嫉妬心より我れを盲目たらしめしものなり。蓋し余は極めて若かりし時、余が正しく、賢く、謹嚴なる者の許のみを訪ふる可きことを警告せるが故なり。是に於て乎、彼れは余をして斯くの如き人物を識別することを得ざらしむるが爲めに、余を盲目たらしめたり。斯くばかり彼れは善人を嫉妬するなり」と。「若し御身にして再び其の視力を恢復せりませば、御身は悪人を遠ざく可きか。」「勿論なり。」「而して御身は正しき者に赴く可きや。」「當さに然り。余は久しく斯くの如きものを見たることなければなり。」

(ibid., 88-97.)

而してクレミロスはブルトスにして如何に搜索するも自己よりも其の品行優れたる者を看出すこと斷じてなかる可しと説く。ブルトスは之れを聽きて曰く「人々は皆な斯くの如く云ふ。然れども彼れ等が事實上富を領有することを得て、富裕と爲るや、彼れ等が際限なく其の放縱の所業を逞しうす可きこと必定なり」と。(ibid., 107-109.)。而してクレミロスが彼れをして其の盲目より免れしめんとするも、ブルトスがジウスの怒を怖れて之れを肯せざるや、クレミロス叫んで曰く「噫、御身は凡ゆる神々の中に在りて最も臆病なる者なり。蓋し縱令ひ短小なる時間なりとも、御身にして其の視力を恢復せんか、御身はジウス大神の主權と其の雷電とが三オポリを値す可しと想像するや。(中略)。余は御身がジウスよりも遙かに有力なることを論證す可し。(中略)。ジウスは何者によりて神々を支配するや」と。クレミロスの従僕カリオ傍らに在りて曰く「彼れは貨幣の大部分を有するが故に、之れに由りて彼れは神々を支配す」と。クレミロス「然らば之れを彼れに供給する者は何人なるか。カリオ「此處に在る此の人なり。」「而して人々は何者を

通じて大神に犠牲を献ぐるや。そは彼れを通じて行はるゝには非ざるや。クレミロスミロスは富神に教へて曰く「御身にして快く之れを承諾するに非ざれば、何人ミも、最早牡牛、又は麥菓子若しくは其の他の何物をも神に供せんとはせざる可し。〔中略〕何人と雖も、御身が之れに貨幣を與ふるに非ざれば之れを購入すること能はず。斯くてジウスにして苟且にも御身を惱まさんか、御身のみ唯り彼れの權力に打ち勝つことを得可し」と(ibid., 123-146)。一切諸物は富に追従す。カリオが奴隸と爲れるも亦た貧故なり。コリントスの娼婦は貧民が彼れ等を挑むも一瞥をすら與ふることなし。而して人々の間に存する一切の技術及び巧妙なる仕掛は富を通じて發明せられたり。即ち彼れ等の一人は座して靴を製造し、他の或る者は鍛冶を業とし、他の者は大工を職とす。他は富神より金を受けて金匠を營み、他は織物を偷み、他は強盜を行ひ、他は布を晒し、他は毛被を洗ひ、他は皮を糝し、他は玉葱を賣り、他は姦通者として檢舉せられて、富神を通じて其の毛髮を抜き去らる。(ibid., 110-181)。

人間社會に於ける百般の事務は悉く皆な富によりて處理せらる。蓋し禍福孰

れを問はず、百般の人事の原因たるものは正さに富以外に存せざるが故なり。戰爭に際しても勝利を得るものは富神の加護を受けたるものなり。何人ミと雖も凡ゆる場合に於て富に飽きたることを聞かず。而も自餘一切の物に就きては飽満の域に達することあるなり。クレミロスと其の従僕とは交互に云ふ、愛に就きても、麴麩に就きても、音樂に就きても、ボンボンに就いても、名譽に就いても、乾酪菓子に就いても、勇氣に就いても、乾無花果に就いても、功名心に就いても、麥菓子に就いても、軍隊的指揮に就いても、扁豆汁に就いても悉く然り。然れども、富に就きては何人と雖も、如何なる際に於ても嘗つて満足せしめられたることなし。或る人にして十三タラントンを得んか、彼れは更らに進んで十六タラントンを取得せんことを欲す。而して彼れが十六タラントンを取得し得たる場合には、彼れは四十タラントンを欲求し、然らざれば彼れは最早此の世に生くるの甲斐なしと稱す。(ibid., 182-195)。

## 三

クレミロスはブルートスを醫藥の神エスクレピオス(Asklepios)の神殿の臥床

に伏さしめんとす。此の時死人の如くに面色蒼白なる「貧乏」登場す。「貧乏」を以て觀れば、富の盲神に視力を與へ、先づ希臘より始めて一際「貧乏」を驅逐せんとするが如きは狂氣の沙汰にして、之れ以上に人間社會に大なる禍害を齎し得るものなし。クレミロスは之れに答へて、フルートスにして今や其の双眼を使用するを得て、盲目的に徘徊することなきに至らんか、彼れは善人を訪れて之れを捨つることなきも、不徳なる者及び不信仰なる者を回避することゝ爲る可し、而して彼れは萬人をして善良且つ富裕ならしめ、神聖なる事物を尊敬せしむるに至る可し、人間社會に對して之れよりも以上の善事を案出せる者非ざる可しと。

而も、貧乏は尙ほ論じて曰く、フルートスにして若し其の視力を恢復し、富を平等に分配す可しとせんか、何人か雖も、汝々として業務に精勵し、若しくは技術を修得せんとする者存せざるに至る可し、而して是れ等のものが悉く消滅し去れるの時、何人か克く鍛冶を業とし、船舶を建造し、衣を縫ひ、車輪を造り、靴を製し、煉瓦を焼き、洗濯を行ひ、獸皮を鞣すことを欲す可き、又た汝等にして無爲懶惰の裡に生活することを得可しとせば、何人か克く犁鋤を把つて土地を耕し、農業の女神の成果を

收めんことを欲す可きやと。クレミロス之れを否定して曰く、御身の説く所は譎語なり、蓋し吾人の奴僕は御身が今列擧せるが如き所のものを悉く吾人の爲めに行ふ可きが故なりと。然らば汝は何處よりして奴僕を取得す可きか。「吾人は貨幣を以て彼れ等を購入す可し」、而も請ふ、先づ問はん、總べての人が金持と爲れるの時、何人か克く奴隸賣買を行ふ可き。「極めて多數の誘拐者中には商人としてテサリアより來り、利得を收めんとしつゝある者あるなり」。然れども、第一に、汝の述べたるが如き状態の下に在りては、一人の誘拐者すら存せざる可し、苟も富裕なる者にして誰か自己の生命を賭して之れを行はんとする者ある可き。斯くて汝等は自ら耕作、掘鑿及び其の他の勞働に従事するの已むなきに至らしめらるゝが故に、現在に比して遙かに苦痛大なる生涯を送ることゝなる可し。「貧乏」は更らに語を續けて云ふ。「加之ならず、汝は寢床の中にも、亦た毛氈の裡にも眠ること能はざる可し。蓋し一個の寢床も存することなかる可く、又た黄金を有する者にして毛氈を織らんとする者存せざる可きが故なり。尙ほ又た汝が花嫁を迎へたる時、汝は彼の女に油を灌ぐことも、若しくは又た色美しき贅澤なる衣裳を彼の女に纏

はしむることをも得ざる可し。而も尙ほ總べて是れ等のものを缺く場合に於て、富は果して何の利益を汝に與ふ可き。然れども、我れ(貧乏)よりして汝の要求しつゝあるものゝ總べては容易に取得せらる。即ち余は、主婦の如く、工匠をして其の窮乏と貧困とによりて生活資料を取得する方法を求むるの已むなきに至らしむるが故なりと。(Ibid., 415-535.)

吾人は貧民の生活と乞食の生活を混同す可きに非ず。乞食の生活方法は何物をも有することなくして生活するに在り。而も貧民の生活方法は節約勤勉なる生活を爲し、何等の餘剰をも有することなきも、而も何等の不足をも亦た有せざるに存す。「貧乏」は「富裕」よりも人間をして心身共に健全ならしむ。富を有する者は脚痛風に罹り、便々たる腹を擁し、足重く、脂肪過多に陥るに反し、貧乏なる者は瘦軀細身にして其の敵に對して獍猛なり。紀律正しき行動は「貧」に存し、騷擾暴動は「富」に屬す。各國の演説家は彼れ等が貧乏なる時は、人民に對し國家に對して公正なるも、彼れ等が公共の資財によりて富裕と爲れる時は、彼れ等は直ちに不正と爲り、庶民に對して叛逆を企て、民主政治に對して宣戰するなり。(Ibid., 547-570.)

## 四

然れども舞臺面は展開して視力を恢復せるブルートスはクレミロス及び多數の人民に伴はれて登場す。彼れは云ふ、而して先づ余は太陽を禮拜し、次いで余を厚遇せる尊きパラス・アテーネ (Hellas) の秀でたる國土とケクロプス (Kekropus) の全領域とを祝福す。余は余が過去の悲運を羞づ。蓋し余は之れを知らずして斯くの如き人々(悪人)と相交りながら何事をも知らずして、余の交友たるに値する者を忌避せるが故なり。噫、不幸なる我れかな。彼此の場合に於て余は如何に不正なる所業を行へるか。然れども余は再び彼れ等の總べてを轉倒せしめ、而して今より後は余が心ならずも悪人に對して余(富)を引き渡したるの事實を萬人に示す可しと。(Ibid., 765-782.) 斯くて正しき者は總べて富裕と爲り、不正なる者は悉く貧窮と爲る。

アリストフアネスは此の喜劇中に於て二個の經濟制度の代表者を對置せしめたり。然れども、是れ等の兩者は少くとも一點に於て相一致す。彼れ等が孰れも皆な奴隸制度の存せざる市邦を想像すること能はざりし點是れなり。庶民は奴

隷労働を以て其の基礎と爲せる享樂の社會主義を渴想せり。希臘の民主主義は  
奴隷制度を廢棄することを得ざるものにして、畢竟するに擴大せられたる貴族主  
義に外ならざりき。而も希臘思想家は他方に於て常に富の倫理化を主張して倦  
むことなかりしものなり。財富の倫理觀は最も善くプラトーンに於て看出さる。  
〔國民經濟雜誌〕第三十卷第二號所載拙稿「希臘思想家の富に關する觀念」一三一—一八  
頁。彼れの理想國に於ては奴隷制度は極めて尠少なる役割を演ずるに過ぎずし  
て、爰には彼れの理想論が其の經濟的必要の認識と奮闘しつゝあるの觀あるなり。  
(Platon, Rep., II. 371, III. 415A.)。然れども法律篇に於ては、彼れは率直に其の必要  
を認め、他の産業と等しく農業をすら奴隷の手中に委ねたり。(Laws, 806D.)。彼れ  
の目的は倫理上よりも寧ろ經濟上に存し、奴隷をして其の運命に満足せしめ、斯く  
て又た更らに善良なる生産者たらしめんとするに在るなり。而して吾人が曾つ  
て本誌上に於て論じたるが如く、雅典國の收入増加策の著者として、外人の温情主  
義的搾取と奴隷労働の國家的利用とに由りて、雅典市民中に於ける富者の負擔を  
輕減し、併せて貧困を絶滅せしめ、共同の資源に依りて全市民をして悉く十分なる

満足の裡に生活せしめ、以て國家を繁榮と安定との時代に誘はんとせるクセノフ  
オン〔三田學會雜誌〕第二十卷第十號所載拙稿「雅典國の收入」も亦た富に關する實際  
的論述と之れに對する倫理的批判との間を往來せり。

## 五

クセノフオンも亦た曾つては大哲ソクラテスを圍みて集れる青年學徒の一人  
なりき。クセノフオンが、ある細徑に於て初めて其の師に行き遇へる時、ソクラ  
テスは彼れの風姿秀麗にして態度謙讓なるを愛で、戯れに其の杖を差し延べて彼  
れの行手を遮りながら彼れに問ふて曰く、人は何處に糧かてを求む可きやと。而して  
クセノフオンが之れに答ふるや、ソクラテスは更らに彼れに問ふ、人は何處に徳と  
譽とを修め得可きやと。大哲は此の青年が答へ兼ねつゝあるを見て、之れに告げ  
て曰く、然らば我れに隨從して教を受けよと。(Diogenes Laertius, *Philosophos Bios*, II. 48.)  
而も吾人の知悉し得る彼れの生涯は長き時代の雲翳に覆はれながら猶ほ彼れが  
飽くまでも實務の人たりしを立證するものあるなり。而して又た彼れの著作に  
して今日に傳存するものに就きて觀るに其の範圍の廣大にして、其の主題の多岐

なるは彼れが實際生活の多方面に興味を有したるの事實を示すものなくんばあらず。彼れの「經濟學」(*Oikonomikos*)は固とより今日の意味に於ける經濟學を論じたるものに非ずして、單に、農場管理及び家計指揮に關する實際的教訓を記載せるものに過ぎざるも、而も「經濟學」の名に於て吾人に傳存する最初の著書にして、爾來「經濟學」は希臘文献の顯著なる題目の一と爲りて幾多の著者によりて論述せらるゝに至れり。此の書の述作せられたる精確なる年月は不明なるも、恐らくは紀元前三百七十年の交なりしなる可しと推定せらる。此の對話篇の最初の諸章中に於ける話者はソクラテスと富豪クリトオンの子クリトプロスとなり。爰にソクラテスの口を借りて表明せらるゝ意見が事實果してソクラテス自身のものなりや、或ひはクセノフオンの其れなりやは論争大なる點なるも、恐らくはクセノフオンの意見なる可しと云ふ。而も吾人は今、此の問題に論入するの必要を見ざる可し。クセノフオンは「經濟」とは醫藥、青銅鑄造若しくは建築の其れの如く、知識の一部門の名稱なりと稱し、(*oikonomikos*, i. 1.) 而して之れに定義を下して「善良なる主人が善く其の家屬を支配するの任務なり」と做せり。(*oikonomou dythos etate oikeēn tou*

*euwtos oikou* — *ibid.*, i. 3; *tou eliou né oikou* — *ibid.*, iii. 3.) *oikonomia* 及び *oikonomikē* なる名辭は其の由來に於て、又た多く其の用法に於て、共に公經濟よりも寧ろ家屬管理に關するものなり。固と家事經濟と公經濟の差違は單に其の規模に於て存するものと看做されたり。(*Xenophon, Memorabilia*, III. iv. 12; *Econ.*, xx.)。然らば家屬(*oikos*)とは何ぞ。そは單なる家屋と同一なりや、若しくは單なる家屋以外に或る人の所有する全財産を包含するや。或る人の有する總べてのものは、縦令ひ其の所有者と同一市邦内に存することなしとするも、家屬の名辭の下に包含せらる。

(*Econ.*, i. 5.)。アリストオテレスも亦た「經濟學」(*oikonomikē*)なる文字によりて家事經營の實際的學問、又たは技術家事に適用せられたる實際的知識(*epistēmē*)を意味し、(*cf.*, *Eth. Nic.*, VI. viii. 3.) 而して家事(*oikia*)は夫婦、父子及び主従(主人と奴隸)の三關係を包含し、又た其の維持の爲めに財産を必要と做せること明かなり。(*Pol.*, I. iii.)。アリストオテレスの著と稱せらるゝ「經濟學」(*Oikonomia*) (其の第一編はテオフラストス若しくはイウデーモス *Euthymos* の手に成り、第二編は更らに遅れて約西紀前二百五十年乃至二百年の交に、後の「逍遙學派」によりて著されたるものなる可し

と推定せらるる)の著者は經濟を四種に區別し、第一、王の經濟、第二、太守(*antipatros*)の經濟、第三、市邦の經濟、第四、家の經濟と爲せり。是れ等四種の中、第一は最大にして最單純、第三は最も多様に於て最も容易、而して最後のものは最も多様に於て最も重要ならざるものと觀たり。著者は第一のものに對して鑄貨輸出、輸入及び經費の四部門を割當つ。貨幣に關しては國王は如何なる種類の鑄貨を發行す可きや、又た如何なる時機に於て其の價值を引上げ若しくは引下ぐ可きやを考慮せざる可らず。輸出入に關しては在任の太守より物納稅(*τῆς*)として幾許を、又た如何なる時機に於て取得するを有利とするや、又た斯くの如くして收得せる財貨を如何なる方法を以て處理す可きやを考慮せざる可らず。經費に關しては、如何なる項目を節減す可きか、又た如何なる時機に於て之れを行ふ可きや、又た國王は貨幣を以て支拂ふ可きか、若しくは物品を以てす可きか(吾人は經費に充つるが爲めに貨幣を貢納す可きや、若しくは又た貨幣を以て購入し得可き物品を以てす可きか)を考慮せざる可らず。太守の經濟は六種の收入を包括す。第一は土地より生ずるもの、第二は其の國土の特産物より生ずるもの、第三は互市場より生ずるもの(*ἀπὸ τοῦ ἀγορίου*)、第四は課稅より生ずるもの(*ἀπὸ τῶν ἐσθῶν*)、第五は家畜より生ずるもの、第六は其の他の雜項より生ずるもの是れなり。是れ等のもの、中、最良なるものは地租即ち十分一稅(*ἑκάστον, δεκάτην*)にして、之れに次ぐものは金、銀、眞鍮等の如き特殊の産物、第三は入港稅及び其の他の港稅の如き貿易と關係あるものより生ずるもの、第四は陸地に於て、又た市場に於て徵せらるる通過稅より生ずるもの(*ἀπὸ τῶν κερῶν τῶν ἐν τοῖς ἀγοραῖς τῶν ἐσθῶν*)。此の語を「植物性物産」及び入市稅より生じたるものと解するものもあるも、誤りなるが如し、第五は家畜稅、即ち十分一稅(*ἐνκαρτίαν, δεκάτην*)。第六は人頭稅(*ἐπικεφάλια*)及び手工稅(*τεχνουργίαν*)を包含す。第三の市邦の經濟、即ち政治的經濟の收入中に在りて最良なるものは土地の特産物、從つて又た特に鑛坑より生ずるもの、次ぎは港に於て賦課せらるる通過稅及び之れに類する課稅(*ἀπὸ ἐμπορίου καὶ ἀπὸ ἀγορῶν*)、而して最後のものは日常生活上の事項より生ずるもの(*ἀπὸ τοῦ ἐπιβιωτικοῦ*)なり。此の最後のものは其の意義不明にして、或る者は之れを民勢調査を指すものと解し、或る者は「公務」(*λειτουργία*)を指すものと解し、他は揣摩臆測を逞しうして其の解釋難を除去せんことを欲したるも、August Böckh は之れを以て

第二十卷 (一四五七) 富神開眼と懶惰奢侈よりの解放

間接税の賦課せられたる、普通の國內交易を意味すること疑ひなきものと断定せり。(Die Staatsverwaltung der Athener, 1817, I Bd, S. 323.)。是れに由りて觀れば、本書の著者の意味する「政治的經濟學」は實に國家に對して收入を與ふるの術に外ならざりしなり。最後の家事經濟は一家が必然單一なる目的を以て經營せらるゝこと能はざるの事實に基きて單純ならざるものなり。而して家事經濟は其の收入及び支出が小規模なるが故に、總べてのもの、中に在りて最小なるものなり。此種の經濟の下に在りて最良なる收入は土地より生ずるものにして、第二は日常生活上の事項、即ち交易の利潤より生ずるもの (ἀπὸ τοῦ ἀλλοῦ ἐκκεκμητόν)、第三は利子を徴して貸出されたる貨幣より生ずる所得なり。而して著者は曰く、是れ等の諸點を離れて、各種の經濟に共通なる事項あり、そは偶然の事項と看做さる可きものに非ずして、特に此の最後の經濟に屬するものと看做されざるを得ざる所のものなり。支出が收入を超過せざること即ち是れなりと。(Pseud-Aristot., Econ, II, 3.)。

## 六

家屬及び農場の實際的管理を論ずるを目的とせるクセノフオンの「經濟學」は又た「富」の本質に論入せり。ゲーテの謂ゆる「單に吾人を改良せよ、然らば一切のものは容易に改良せらる可し」(Lasst uns nur besser werden, bald wird's besser sein)なる見解は又た外界の事物に對する希臘思想家の其れなりき。彼れに従へば、財貨とは其の所有者に有用なる總べての物件なり。彼れを害するものは其の財貨の一部を構成するよりも、寧ろ煩累たるものなり。馬匹を購入せる者が調馬法を知らずして、落馬し、之れが爲めに負傷せりさせば、馬匹は其の富に非ず。土地と雖も之れを耕す者が却つて之れによりて損失を蒙るが如き場合には彼れに取りては富に非ず。羊に就きても亦た然り。(Xenoph., Econ, i, 7-9.)。同一物を雖も其の諸用法を知れる者に取りては富たるも、之れを知らざる者に取りては富に非ず。例へば、巧みに笛を吹く者に取りては、笛は富なれども、吹笛の術を知らざる者に取りては彼れにして之れを賣却することを得るに非ざれば、そは無用の砂礫に比して毫も優る所なし。然らば、吹笛の術を知らざる者に取りても、彼れにして之れを賣却するとせば、笛は富を構成す可きものと稱せざるを得ず。(Ibid., 10-11.)。洵に之れを

賣却するの道を知れりせば、それは彼れに取りて富と爲るも、而も買手が其の用法を解することなく、又た賣手が其の用法を知らざる或る物に代へて之れを賣却せりとせば、富は賣却せらるゝも尙ほ富たることなかる可し。富は是れよりして或る人が利益を受け得可き物件より成る。貨幣と雖も之れが用法を知らざる者に取りては富に非ず。例へば或る者が其の金を使用して妾を蓄へ、此の女の爲めに自己の身心を害し、又た其の家庭の状態を不良ならしめたりせば、彼れの金は彼れに取りて、毫も有利なるものと稱するを得ざる可し。貨幣は、其の所有者が其の使用法を知らずせば、財貨中より排除せらる可きものなり。(Ibid., 12-13)。而して管だに益友が財貨たるのみならず、敵軍の如きも之れを利用して利益を受くるの道を知悉せる者に取りては財貨なり。(Ibid., 14-15)。

對話は怠惰者の問題に入る。ソクラテス曰く「吾人は之れを利用して勞作せんか、自家の繁榮を増加し得可き一定の知識及び資源を有する人々を見るも、彼れ等は之れを行はんことを欲せず、従つて彼れ等の能力は彼れ等に取りて無用なるを認むるの時、彼れ等の知識も彼れ等の資産も孰れも彼れ等に取りて富を構成する

ことなきに非ずや」と。(Ibid., 16)。クリトプロス曰く「戦時及び平時の技術に長ずるも、之れを強制する主人を有せざるが故に、是れ等のものを利用せんことせざる名門の人々あるを見る」と。ソクラテス答へて曰く「繁榮を願ひ、利潤を生ず可き行爲を行はんことを欲するも、彼れ等は尙ほ彼れ等を支配する主人によりて之れを行ふことを阻止せらるゝものとせば、彼れ等は明かに主人を有せざるものと稱するを得ず」と。「然らば彼れ等を支配する者は誰れぞ。吾人は何處に於ても彼れ等を見ることを得ざるに非ずや」。否、寔に彼れ等は到る處に於て認めらるゝを得可し。汝にして怠惰、柔弱及び無頓着の有害なるを知ることせば、是れ等のものが最も有害なる支配者たることは汝の熟知する所に非ずや。加之ならず、勝負事及び無益なる社交的満悦の如き快樂の女神に變装せる狡猾なる主婦の彼れ等を支配するあり。而して彼れ等は時の経過に連れて彼れ等の爲めに瞞着せられたる人々に取りても完全に彼れ等を支配する快樂の衣裳を以て假装せる苦痛に過ぎざることか明かき爲る。而してそれは彼れ等に熱中する者に對する影響に由り彼れ等を阻止して有利なる業務に従事することなからしむ。(Ibid., 17-20)。

クリトプロスは曰く、然れども、他の者は斯くの如き暴君によりて勞作を妨げらるゝことなくして、其の氣力の限りを盡して業務に當り、其の所得を増加する方法を案出するも、而も彼れ等は其の財産を浪費し、家政困難に煩はさるゝことあるなりと。篇中のソクラテスは之れに答へて曰く、彼れ等も亦た残忍なる主人に仕ふる奴隸なり。其の或る者は食卓の奢侈に、或る者は女色に、他は飲酒に、他は愚劣にして而も費用大なる野心に對して奴隸たるなり。彼れ等が其の征服せる人々に對する支配は極めて苛酷にして、是れ等の人々が血氣盛んにして勞作を行ひ得る間は、彼れ等は是れ等の人々を驅つて其の勞作の凡ゆる収益を彼れ等に致し、自己の欲求に對して、恰も租税を納むるが如くに、支拂を行はしめずんば已まず。然れども、彼れ等は是れ等の人々にして年老ひて勞作するの力なきに至れるを見るや、彼れ等をして其の晩年を窮迫の裡に送らしめて顧みず、更らに他の人々をして其の奴隸たらしめんと努むるなりと。然れども、吾人は須らく武力によりて吾人を奴隸たらしめんと試むる者に對すると等しき勇氣を以て是れ等の暴君に對して吾人の自由を擁護するが爲めに戰ふ可きものなり。武俠寛仁なる敵は彼れ等

が其の敵國民を征服したる時は屢々細心なる嚮導によりて彼れの資性を改善し、爾後、彼れ等をして更らに安慰なる生活を送らしむるものあり。然るに此の暴虐なる主婦たる欲情は彼れ等が人間を支配する限り、其の身體、其の精神及び其の財産を毀損して止むことなし。(Ibid., 21-23)。實にクセノフオンは第十八世紀の經濟學者の如く、一身一家、延いては一國一社會の富裕繁榮を招來す可き原因を求め、で自利的衝動に到達することなく、貧困窮乏の原因を探りて之れを怠惰と奢侈とに得たるなり。

## 七

然れども自己を省察して、自ら克く是れ等の欲情を節制しつゝあることを信するクリトプロスは他に其の家産を増加し得可き道を問ふ。ソクラテス答へて曰く、余は余が有する以上に毫も富を要せざるも、既に十分に富めりと考ふ。而もクリトプロスよ、汝は余を以て觀れば著しく貧乏なるの觀あり。而して余は時折汝の爲めに極めて大なる憐愍を感ずるなりと。(Ibid., II, 12)。蓋しソクラテスは有する所尠きも其の所要を満足せしめ得るに足るに反し、クリトプロスは彼れが

現在に於て有する高の三倍を取得せりとするも、其の華美なる生活と其の名聲を維持するが爲めに十分なる高を有するものに非ざるの觀あるが故なり。

第一に彼れは屢々大掛りなる犠牲を供げざるを得ず。然らざれば、神も人も共に彼れを許すことなきなり。第二に彼れは多數の外人を招じて豪華なる饗應を行はざる可らず。尙ほ其の上に彼れは其の同市民に饗應を行ひ、之れを欸待せざる可らず。然らざれば、彼れは味方を有せざるに至る可し。加之ならず、國家は彼れに馬車競走及び祭の行列の爲めに馬匹を飼養し、歌舞隊を訓練し、裝備し、體操練習所を管理し、居留外人保護の義務を履行するの形態に於て苛重なる貢納を行ふ可きことを要求し、戰時に在りては三段機船艦裝の義務を割當て、負擔困難なる財産税を徴收するなる可し。而して彼れが其の義務の履行に於て吝かなる場合には、雅典人は常に恰も彼れが其の寶庫を掠奪せるが如くに峻酷なる處罰を彼れに科するなり。(ibid., 4-6)。洵に斯くの如き章句は當時の雅典國が富豪に對して行へる苛求を善く想見せしむるものあるなり。(前掲「雅典國の收入」參照)。

ソクラテスは尙ほ語を續けて云ふ。「加之ならず、余は汝が自ら富裕なりと思惟

し、其の富を最も善く利用する方法に意を用ひずして、其の一切の注意を娛樂に傾け、宛然斯くの如く行ふの權利を有するが如き態度を取りつゝあるを見る。這般の理由に據りて、余は汝が救済し難き災禍に陥り、大窮乏に瀕することある可きを虞れて、汝を慰むなり」と。然るにソクラテス自身は更らに新たなる要求を有する可きも、進んで彼れを援助せんとする人々を有し、各人の出捐する所は縦し少額なりとするも、彼れの日常生活は充溢の裡に浸るなる可し。(ibid., 7-8)。

然れども自餘のソクラテス學徒に比し、勞働及び經濟生活に對して好意を有せりと稱せらるゝクセノフォンすら、プラトーン及びアリストオテレスの著書に於けると等しく機械的技術に對する憎惡を有せり。彼れは手工業を以て戸内の坐業により、又た其の或るものは終日爐前に勞作するによりて之れに従事する者及び之れを管理する者の身體、延いては又た精神をも軟弱ならしむるものと觀たり。工匠は又た其の友人若しくは國家の利益の爲めに盡瘁す可き餘暇を缺く。一定の國家、殊に軍事的國家に在りては、其の市民が之れに従事することを許容せらる可きに非ず。(ibid., iv, 2-3)。而してクセノフォンの尙農意見に就きては吾人曾

つて之れを「雅典國の收入」中に述べたり。

工匠の技術は固より一般に非難を受け (*eniphtor*)、當時の社會に於ては勞働階級と自由職業階級くるなかりき。 (*ibid.*, 2.)。 Ernest Barker は雅典に於ては勞働階級と自由職業階級の間に毫も社會的差別存することなく、總べては平等の地位に立ち、*symeiothes*なる語は國家の爲めに勞作する長官及び其の勤務若しくは貨物を公衆に對して販賣する醫師若しくは陶工を呼ぶが爲めに等しく使用せらるゝを得たるの事實を指摘し、「市邦」が必然的に「閑暇の郷土」に非ず、又た其の市民の生活が奴隸制度の基礎の上に存し、又た彼れ等が勞働を蔑視するの傾向を有せるものにも非ざること論じ、此の點に於てスバルタと雅典、哲學者の意見と實際の習慣とを同一視す可らざるを主張し、 (*Greek Political Theory, Plato and his Predecessors, 1918, p. 29.*) Zimmermann が Salvioii より引用せる章句 (*Le Capitalisme dans le monde antique, p. 148.*) を引用して、 (*Greek Commonwealth, p. 265-266.*) 更らに彼れ等工匠の目的とする所が其の完成なる人格上の自由と行動の自由とを維持し、國政に參與し、法廷に連り、競技及び祭典に加はらんとするに在りしことを主張せり。 (*op. cit., p. 30.*) 然れども靜かに思ふに、

民主々義の發達に連れて、社會的に蔑視せられつゝありし勞作階級が政治的に又た社會的に擡頭し來り、其の時間の多くを公務の爲めに割き、教養なく訓練なくして議會及び法廷に列し、以て之れを惡化せしめ、自家本來の勞働を奴隸階級に委して安んずる生活を貪らんごしつゝありし事實は臆がてクセノフオン、プラトーン及びアリストオテレス等諸思想家の意見を喚起せるものには非ざるか。吾人は僅々約四萬人に過ぎざる雅典市民に對して、八萬人の奴隸の存したる事實を聞く。固より彼れ等の中にはラウリオンの銀鑛に於て使用せらるゝ二萬人を始めとして、警吏及び書記の任務に當れる多數の國有奴隸若しくは國務に服せる多數の奴隸の存せると明かなりと雖も、富裕なる雅典市民は屢々多數の奴隸を私有して或ひは之れを貸出し、或ひは之れを自己の業務に使用しつゝありき。 Barker 其の人の謂へるが如く、富裕なる市民の享有せる富と安樂なる工匠の享有せる安樂とは共に奴隸の勤務に依頼する所大なりしものなり。 (*op. cit., p. 33.*) 固より雅典市民の大多數を形成せる一般工匠と農民とは其の收入を奴隸勞働に基かしむることを得ずして、自己の勞働に據りて生活するの必要に驅られたりと雖も而

も這般の事實こそ却つて一般民衆をして懶惰者の共產主義的國家を仰望せしめたる原因たるなり。爰に於てか、一方に於ては外人の貢納と公有奴隸の搾取とよりに生ずる國家の収入を増大せしめて、一般市民をして安慰なる生活を享樂せしめんとするの意見、他方に於ては富と貧とは等しく生産の能率を減退せしむと稱して中庸の生活を選ばんとするの意見を生ぜしめたるなり。斯くして富の正義化はアリストファネスの戯曲に表明せられ、怠惰及び奢侈よりの釋放はクセノフオンによつて高調せらるゝなり。然れども吾人は又た當時に於ける富の正義化が生産の奴隸労働化を包意するものなることを記憶せざるを得ざるなり。

## シニョアの勞銀論

濱田恒一

### (一)

シニョアは、勞銀率決定の原因を以て、經濟學が包含する一切の主題中、最要最難なるものと稱してゐる。従つてその主著たる「經濟學」に於ても、最も多大の頁を之に割いてゐる。

その所説を要約するならば、一般勞銀率は、労働者支持の爲めの基本 (the fund for the maintenance of labourers) の額と、之に依つて支持せらるべき労働者數の割合に依つて定る。該基本の額は一部は勞銀の生産に於ける労働者の生産力、一部は勞銀の生産に従事する労働者數が全労働者數に對する割合に依つて定る。更らに、労働の生産力は労働者の人格若しくは労働者が資本又は自然的要因から受くる助力、或は干渉からの解放に依る。又這個の割合は、レント及び分配の不當不平等なる課税なければ、一部は利潤率に一部は勞銀の生産に使用される資本の前拂期間に左右される。次に、一定時に於ける利潤率は資本家及び労働者の過去の行爲に依るものである。たゞ前拂期間のみは、何等一般準則の據るべきものはないが、利潤率の低い時に長く、高い時に短い傾向があるといふのである。